

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Major Aspects of Chicano History

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004306">https://doi.org/10.15021/00004306</a>

# チカーノの来た道

——その歴史的経緯——

黒田悦子\*

## Major Aspects of Chicano History

Etsuko KURODA

Some historical publications during the 1970-80's have brought a great quantity of new knowledge and value-free viewpoints to the still embryonic Chicano studies. With these contributions in mind, the author presents major aspects of Chicano history, a completely new subject in Japan.

The first chapter delineates the processes by which Mexicans came to be categorized as an ethnic people: 1) Spanish and Mexican periods, 1540-1848; 2) confrontation with Anglos, mid-19th century to 20th century; and 3) increase of Mexican immigrants and their protest movements, 20th century to 1950.

The second chapter describes the movements promoted by four political leaders in the 1960's: César Chávez, Corky Gonzáles, José Angel Gutiérrez, and Reies Tijerina. Emphasis is given to the reporting and interpretation of the political upheaval of Tijerina and the *Alianza* in New Mexico, where the author carried out fieldwork in the 1970's.

The third chapter provides up-to-date facts on the alliance of the *hispanics*, since the author takes the view that this new alliance is a form of sublimating Chicano power.

はじめに

1. 民族集団化への過程
2. 1960年代の復権運動

3. ヒスパニック連合の動向

あとがき

\* 国立民族学博物館第四研究部

## はじめに

チカーノもしくはメキシコ系アメリカ人という言葉は日本では未だ時折しか使われていない。私のみるところ、新聞に合衆国のサンベルトの経済状況についての記事が載る時、日本の政治家の無責任な発言が合衆国の民族集団の反発を買って社会問題となり報道される時、そんな折にマス・メディアに乗って使われるぐらいかと思われる。それでは、このチカーノとよばれる人々のことが研究者により詳しく紹介されているかと思って調べてみると、そうでもない。アメリカ史に関する書物のなかで軽く言及されることが多く、必ずしもチカーノの存在が正確に伝えられているとは思えない場合もある。

もっとも合衆国においてもチカーノについては1970-80年代にやっと確実な文献が出版されたというのが現実であり、極めて新しい研究分野といえよう。私は1976年と1979年の夏から秋にかけて各々3か月余りニューメキシコ州を中心にしてチカーノを調査し、その後、報告書を発表してきたが、1980年代に入って幾つかの良質な歴史書が出版されて初めてチカーノの全体像が理解できるようになったので、本稿でチカーノの歴史について概説を試みることにした。なお、最初のことわっておくが、「チカーノ」はスペイン語読みでは「チカノ」と短く書くべきかもしれないが、英語読みでは「チカーノ」と音引きで発音されるので、私は英語による発音の表記を採った。元々、英語圏から出てきた用語であるからである。

さて、アメリカ合衆国においてはチカーノは統計やエスニック関係辞典ではメキシコ系アメリカ人と記され、黒人に次ぐ人口を擁する大きな民族集団であり、今や無視しえない存在である。ちなみに、黒人の人口は約2700万人で、合衆国総人口の12パーセントを占め、最大の民族集団である。第二番目のメキシコ系アメリカ人は約870万人で、総人口の3.8パーセントを占めている [VIGIL 1987: 2-3]。さらに、不法入国者が少なくとも100万人はいるとされているので [MOORE 1970: 50]、メキシコ系の人々の実数は公式発表をずっと上まわる。それでも黒人に比べて率が少なく、身体上の特徴からそれと気がつくことが少ないのだが、合衆国の南西部諸州に行くと、頻繁にメキシコ系アメリカ人に会うはずである。というのは、この人々の90パーセントがカリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、コロラド、テキサス州に住んでいるからである。なお、残りの人口は中西部や北西部に住んでいる [CORTÉS 1980: 699]。

チカーノとは後にのべるように、メキシコ系アメリカ人の政治的アイデンティティ

を表わす用語であり、現実には各州で異なった呼び名が使われている。ニューメキシコ州北部とコロラド州南部ではスペイン系アメリカ人カイスパーノ(スペイン系の人)、テキサス州ではテハーノ(テキサスの人)、ラティノ(ラテン人)、ラテンアメリカン、アリゾナ州やコロラド州東部や中西部や太平洋岸の北西部の一部ではメキシカンとよばれている [CORTÉS 1980: 697]。このように呼称は異なるが、ほとんどの人が自らをメキシコ系だと考えており、ニューメキシコ州北部とコロラド州南部の一部の人だけがスペイン系という呼称にこだわる。メキシコ系の人々はスペイン系の存在を無視しがちであるが、私はその存在を認めるべきだという立場にある。たしかに、スペイン系の人口はメキシコ系にくらべて少数で、80万程にすぎないが [SWADESH 1980: 950]、現実自らをスペイン系だとする人々がいる限り無視するわけにはいかない。自らのアイデンティティこそが各人の帰属を最終的に決める要因であるし、ニューメキシコ州北部とコロラド州南部ではスペイン系の人々がメキシコ系と異なってくる社会経済状況があった、と考えられるのである。それについては第一章と第二章でふれたい。

チカーノに相対する民族呼称はアングロである。この呼称は南西部諸州で普及しており、主としてメキシコ系の人々が白人系のアメリカ人に言及する場合に使われる。批判的な意味がこめられており、白人系アメリカ人のなかには、この言葉こそ逆差別用語であると指摘する人が多い。それに、白人系のアメリカ人といっても、種々な民族的背景があり、アングロとよべない人も多いのである。そんなわけで、私は「アングロ」という言葉を使うのにためらいを覚えるが、現地でよく使用される用語なので採用することにした。

上記のような約束事を前提にして、以下に続く3つの章でチカーノの辿ってきた道を概説したい。第一章では時代順に各州でこの人々が少数民族集団になった過程を追ってみよう。第二章ではチカーノの歴史上画期的な事柄であった1960年代の復権運動の諸相を報告したい。第三章でヒスパニック(スペイン語を話す各種民族集団の人々)の政治的動向を扱ったのは、それが第二章で紹介した1960年代のチカーノの復権運動を止揚する動きの一つであると私は判断しているからである。中曽根康弘元首相の不用意な発言に対してヒスパニックが抗議した事件が1986年に起こっており [朝日新聞 1986: 9月24日, 27日, 10月4日]、それを契機にヒスパニックの名が我が国でも知られるようになったので、この集団とチカーノとの関係について言及しておきたいと思ったからでもある。

## 1. 民族集団化への過程

合衆国には少なくとも106の民族集団が存在していると『アメリカの民族集団——ハーヴァード百科辞典』の編集者達はみなしているが [THERNSTROM 1980], その内でインディアンとメキシコ系アメリカ人は単なる移民集団でない点で共通性がある。インディアンはアメリカ大陸の原住民であり、この地に対する先住権を主張し、後続のメキシコ系とアングロ系アメリカ人（以下、アングロと略す）を批判できる立場にある。メキシコ系の人々は先住のインディアンに対しては加害者であったが、アングロとの関係では被害者であった。彼等にとって、合衆国の南西部は1821年まではスペイン領、1848年まではメキシコ領であり、自分達の国の領土であった土地が合衆国により占領された、という意識がある。ところが、アングロにとっては、西部は自分達が開拓した土地なのである。このように、三民族集団の立場は互いに異なるので、西部の歴史は三者三様の書き方ができるだろう。

アングロの歴史家は多彩な研究を提出した。フレデリック・J・ターナーは民主主義と個人主義を育むフロンティアとして西部を捉えたが [大橋（編）1969], これに批判的な研究者は自営農民という神話を否定し、西漸運動を東部の資本主義に支えられた領土拡大の動きと解釈した。その意見はリチャード・ホーフスタッターの『改革の時代——農民神話からニューディールへ』 [ホーフスタッター 1988] に明確に提示されている。このような史観を打ち出した研究に続いて、1950年代以降には次々と西部開拓時代の社会史が出版され、日本でも訳本が出るようになった [アードーズ 1984; マーティン 1986; スミス 1971]。このようなアングロ側からの研究はアメリカ史専門家の領域であって [有賀・木下（編）1979を参照], 私のような門外漢が付言できることはない。

インディアンは儀礼や民話や物質文化に自らの歴史を刻みこんでいったといえようが、それらを詳細に記録したのは1920-30年代のアメリカ人類学界であった。そして、1960年代からはインディアン出身の人類学者や研究者が出るようになり、自民族の復権を学的にも進めてきたといえよう。

これら二民族にくらべて、メキシコ系の人々の歴史の掘り起こしは遅れている。1960年代の復権運動の影響を受けてアングロ系中心の史観を否定する立場を打ち出した書物が多く出版されたが、1970-80年代になって初めて客観的な事実に基づけられた歴史書が発表されるようになった。これらの成果に頼りながら、南西部でメキシコ系の人々が民族集団となっていく過程を追ってみたいと思う。まず、彼等がスペイン

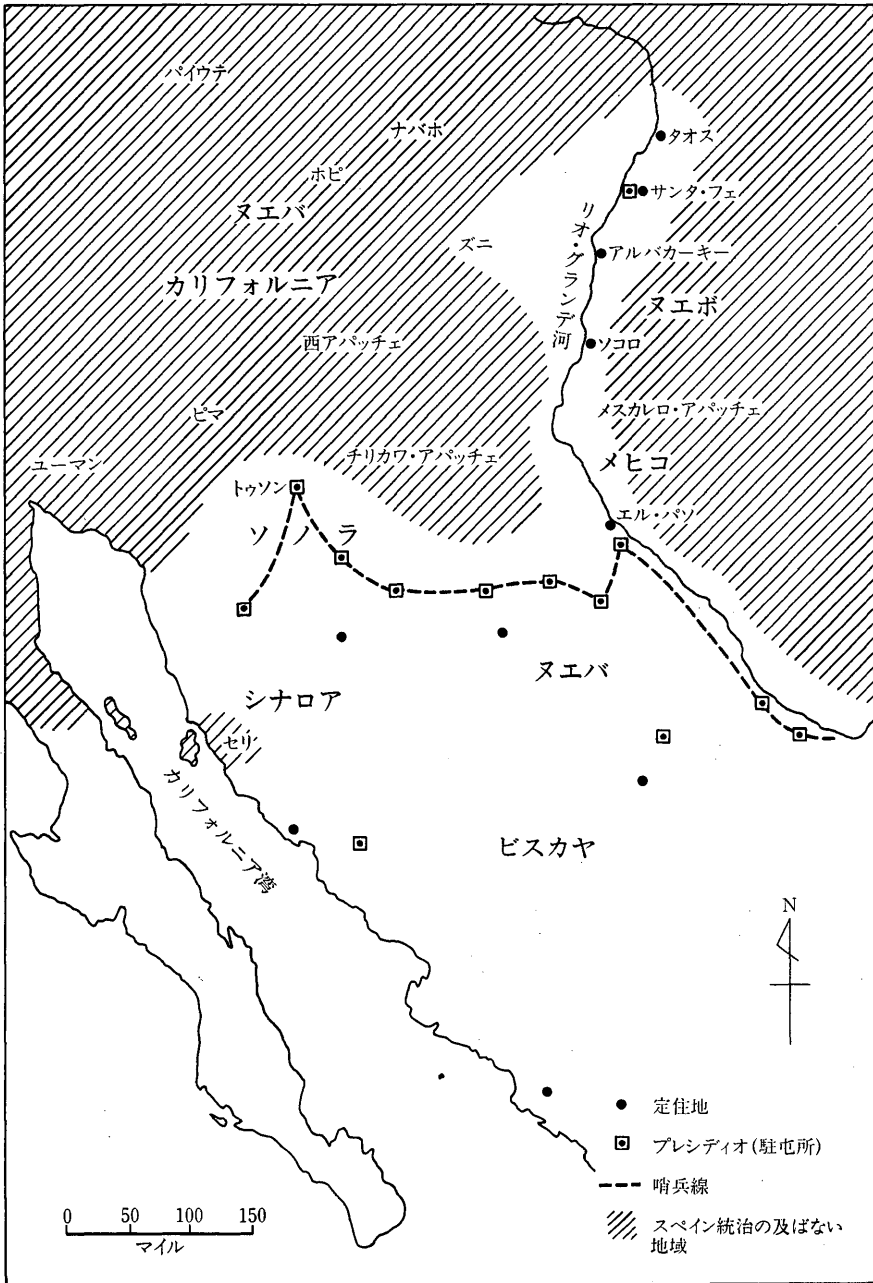
国民, 次いでメキシコ国民であった時代から説き明かしていこう。

## 1) スペイン (1540-1821年) とメキシコ (1821-1848年) の 北方領土時代

南西部がスペイン領であったのはコロナードの探検隊が1540年に大平原にわけ入ってから1821年にメキシコがスペインから独立するまでの約280年である。同じ南西部がメキシコ領であったのは1821年から, メキシコが合衆国との戦争に敗北してグアダルーペ・イダルゴ条約を結ぶ1848年までの27年間である。結局, 南西部がスペインとメキシコの北方領土であったのは300年余ということになる。

この北方領土についてメキシコの人類学者レオン・ポルティエーリャは示唆に富む指摘をしている。それによると, アメリカ人が南西部とよぶ地域はメキシコ人からは北方(ノルテ)とよばれる土地であり, 国家のヘゲモニーの及ばない辺境であった。スペインによるメキシコ征服後すぐさま探検された土地でありながら, 「人間に敵対する荒地」であり, 「野蛮なチチメカ(7-12世紀にメキシコ中央高地に攻め入った諸民族集団の総称)の住む土地」とされ, 容易に植民されない地域であった。銀山で栄えたサカテカスより北は蛮族の地でしかなかったのである(地図1参照)。そのため, この地に入植した者の数は少なく, 少数の人間がインディアンの出沒する広大な荒地で生存していくためには集団でくらすより方法はなかった。フランシスコ会やジェスイットの宣教師が教会を建て, それを中心にして植民者が村を作り, 国王や副王から授与された土地を耕し, 共有林や水利権を守りながら共存していった。農業に加えて, 自由放牧の牛や羊の飼育が仕事となり, ロデオが村のイベントになった。このような生活をレオン・ポルティエーリャは北方型(ノルテーニョ)とよび, ここから合衆国のカウボーイ生活が由来したと説いている [LEÓN-PORTILLA 1972]。つけ加えていこうと, 北方型の生活ではカトリックが人々の宗教であり, 主にフランシスコ会がもたらした祝祭や芸能が定着し, ギター音楽が好まれ, コリードやバラッドとよばれる詩が朗唱された。民芸としては金銀のすかし細工, リオ・グランデ・スタイルの織物, 錫や鉄の製品, 祭壇と聖人像の木彫が発達した [詳細は CAMPA 1979]。この北方型の生活スタイルにも現実にはかなりの地域差があったようである。

ニューメキシコ州への植民は一番早く, 1598年にオニャーテに率いられた兵士, 宣教師, 植民者がリオ・グランデ河上流に到着した。その後, 1680年にプエブロ・インディアンの反乱が起こり, 1692年にデ・バルガスにより再征服されるまで, この地のスペインによる支配は中断されたが, 植民活動はリオ・グランデ河沿いに進み, 農牧



地図1 18世紀のヌエバ・エスパーニャ北西部

(Miguel León-Portilla. The Norteño Variety of Mexican Culture: An Ethnohistorical Approach. In Edward M. Spicer and Raymond H. Thompson (eds.), *Plural Society in the Southwest*. Albuquerque: University of New Mexico Press, p. 97 の地図より)

業に依存する村落共同体が点在するようになった。しかし、この植民の前線が現在のニューメキシコ州の北部を越えて拡大することはなく、19世紀の初めになってから、余剰の人口が農地と放牧地を求めて同州の東西南北に伸びていくところだった。しかし、その矢先にアングロが多数入ってくるタイミングとなった。当時のニューメキシコのスペイン系の人口は約6万人とされている [MOORE 1970: 12; ROSENBAUM 1981: 20-22]。

植民者主導型のニューメキシコと対照的なのはカリフォルニアの植民で、ここでは政府が中心となって植民が進められた。このスペイン領土は永く捨ておかれたが、英国とロシアの進出を恐れ、スペイン政府は1769年に探検隊を派遣し、その翌年より人材を送りこみ、サン・ディエゴからサンフランシスコに至る海岸沿いにカトリックの伝道区と村を建設した。ミッションの活動に重きがあり、植民者は1826年になっても8千人という少数であったが、大牧場を経営する豊かな生活が保証された。メキシコ本国における自由主義的改革の余波を受けて1831年には教会領の売却が始まり、植民者は土地を買い加えたので、大方の植民者が大土地所有者となった。この直後にアングロのカリフォルニア進出が始まった [ROSENBAUM 1981: 28-30]。

テキサスの植民はニューメキシコとカリフォルニアの中間的な型で進んだ。地理的にみると、テキサスはメキシコ湾岸沿いのテハスとニューメキシコ側のヌエボ・サンタンデルに分かれる。この内、テハスでは牧牛と農業を生活の中心にするカリフォルニア型の植民が進んだ。一方、ヌエボ・サンタンデルはリオ・グランデ河沿いの土地なので、ここではニューメキシコと同様に植民者は農業と牧羊に従事し、まとものよい村落共同体を形成した。このような地域差があったが、19世紀初頭にテキサス全体で約5千人の植民者しかいなかった [MOORE 1970: 12; ROSENBAUM 1981: 30-36]。

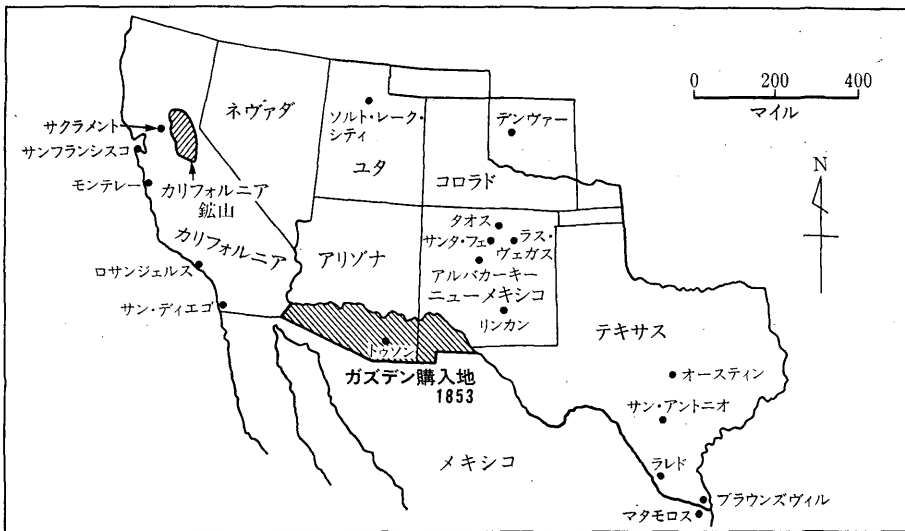
最後に、アリゾナではアパッチェの存在が大きかったため植民者が入植せず、トゥソンの城囲都市内に駐屯隊の関係者が固まって住むという状況であった。そのため、19世紀前半になっても人口は千人程に過ぎなかった [DOBYNS 1976; MOORE 1970: 12, 16]。

上記のことから判断すると、19世紀の初めにニューメキシコ、カリフォルニア、テキサス、アリゾナの広大な土地に僅か8万人程の植民者しかいなかったわけで、そこへ合衆国の利権をになったアングロ系の人々が進出してくることとなった。こうして二つの民族集団の人々が接触することとなったが、そこで何が起こったかを次にみてみよう。



2) アングロ系アメリカ人との対決——19世紀半ばから  
20世紀初頭まで

合衆国のメキシコ領への進出はテキサスに始まった。この地には1819年から主に南部人が住み始めていたが、流入する人口は急速に増え、当時メキシコのコアウィラの一部であったテキサスの買収や独立が企てられた。1835年にアングロ系住民によるテキサスの反乱が始まり、これが高じて1848年には米墨戦争（1846-48年）に発展し、合衆国が勝利を納め、1848年にグアダルルーペ・イダルゴ条約が結ばれた。この条約でメキシコはリオ・グランデ河を国境と認め、南西部（今日のカリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、テキサス、ユタ、ネヴァダ、とコロラドの一部）を合衆国に売却した（地図2参照）。領土の割譲はこれで終わらなかった。合衆国は大陸横断鉄道の南ルートを開くためにメシーリャ・バレー（アリゾナ州の南部分とニューメキシコ州の南西部分）の売却をメキシコに迫り、財政上の危機にあったメキシコは1854年にこの地域を手渡し、ガズデン購入地として合衆国領に加えられた [CORTÉS 1980: 702]。こうして、メキシコはスペインから独立して30年も経たない内に領土の約半分を失ってしまった [ACUÑA 1972: 9-33; ROSENBAUM 1981: 18]。ちなみに、この時、合衆国が獲得した領土は全領土の約3分の1にあたる [MOORE 1970: 12]。グアダルルーペ・イダルゴ条約のⅧ条とⅨ条でメキシコ系住民の財産と市民権の保証



地図2 南西部諸州

(Robert J. Rosenbaum. *Mexicano Resistance in the Southwest*. p. 19, Map 1 より)

が確約され、X条で同住民に所有地の保証が唱われたが、このX条は最終段階で削除された。このことは後年、チカーノの運動家によって合衆国側の不誠実さを示すものとして批判的にされた。しかし、法律の一条項が新しく合衆国市民となったメキシコ系の人々を救済する程には現実には生やさしくなかった。合衆国領となった南西部にはアングロ系の人々が進出しメキシコ系の人々と接触し、急激な社会変化が起こるが、州ごとに状況は異なったので、以下に各州でのメキシコ系の人々の経験を略述していこう。

カリフォルニアは短期間にアングロの支配に下った。1848年にサクラメント溪谷で金が発見されたことがきっかけになって各地でゴールドラッシュが起こり、陸路と海路から多数のアングロが到着したことはカリフォルニア（当時、カリフォルニアに住んでいたメキシコ系の人のこと）にとって不運であったが、人々を同州にひきつけたのは金とは限らず、豊かな土地と温暖な気候でもあった。入植者は数多く、土地を合法、非合法を問わず奪取し、早くも1880年代にはカリフォルニアは没落してしまった。豊かな地主層は団結すれば自民族の利益を守るように政治を動かしたはずであるが、それが実現しなかった。彼等は非能率なメキシコ政府の政策に反発し、開明的な合衆国の政策に惹かれながらも、プロテスタントで差別をむき出しにしたアングロに怒りを覚えるという二律排反の状況に陥り、どちらの政府に対しても有効に対応できなかったために、僅か一世代の間にヘゲモニーを失ってしまった。この間、ティブルシオ・バスケス、ホアキン・ムリエッタ、ホセ・ルイス・フローレスといった人々が暴力でアングロの支配に抵抗したが、組織力の弱い反乱であった。アングロ側は彼等を「義賊」と新聞に発表する程の余裕を持つに至っていた。これに加えてロサンジェルスやサンタ・バーバラでメキシコ系住民の暴動が起こったが、アングロ支配を揺さぶるほどの力にはならなかった。カリフォルニア南部は北部にくらべてメキシコ系の人々が大勢住み続け、北部よりは恵まれた生活をしてきたが、アングロ優勢という時代の流れはここまでも及び、土地を失った人々が都市の狭い空間に押しこまれることとなり、この居住区をバリオとかコロニアと称した [PITT 1966: 198-229; ROSENBAUM 1981: 28-33, 54-67]。歴史家カマリョの研究をみると、カリフォルニアが急速に没落し、土地を失った人々が南カリフォルニアの町々やサンタ・バーバラにバリオが出現していった過程が詳細に描かれている [CAMARILLO 1979]。

隣りのアリゾナ州ではメキシコ系住民が千人程の少数だったので、アメリカ統治の開始はこの人々よりもむしろインディアンに大きな圧迫を与えたが、1880年にはアパッチェの抵抗も終わった。これと期を一にして、鉄道が敷設され、鉱山が開かれ、多

数の労働者を必要としたので、テキサス州づたいや直接メキシコからメキシコ人が入ってきた。これ以外に牧牛や綿花栽培にたずさわった人もいたが、いずれにせよ低賃金労働者であり、人種差別の対象になった [MOORE 1970: 16-17]。このように、アリゾナ州ではメキシコ系の人々の問題は他州よりは新しく始まったものであった。

テキサス州では（以下の記述は [ROSENBAUM 1981: Chapters 2-3] に負うところが多い）、メキシコ湾岸沿いのテハスは簡単にアングロの手に落ち、大規模の牧牛業者の制するところとなった。リオ・グランデ河沿いのヌエボ・サンタンデルでは河沿いに村落共同体をつかって農牧生活を送っていた人々の抵抗が19世紀末まで続いた。抵抗が長びいた理由としてはメキシコ系の人々の結束が強かったこと、この地方に鉄道が入るのが遅れて20世紀初めまで交通の便が悪かったこと、同州に入ったアングロに南部人が多く人種差別が強かったこと、テキサス・レインジャーとよばれる遊撃隊の残虐行為がメキシコ系の反発をおおったこと、などが挙げられる。こうしてみると、現在でもテキサス州でメキシコ系への偏見と差別が大きい理由が理解できる。

ヌエボ・サンタンデル地方の主な抵抗運動はコルティナとコルテスによって起こされた。ファン・コルティナはリオ・グランデ河沿いのカマルゴの名家に生まれたが、アメリカ統治下になってから家族の所有する土地が法廷闘争に持ちこまれ、当時の多くの例のように、土地を失いアングロ支配に悩まされていた。母親の雇っていた牛飼いがアングロの警察官に不当に射殺されたのがきっかけとなりコルティナは武装し、仲間と共に1859年に反アングロの戦いを始めた。一時はブラウズヴィルの町を占居するまでに至り、その抵抗は7か月続いた。その後、コルティナはメキシコに下り、フランス干渉戦争に参加しメキシコのために戦い、ついで南北戦争時には連邦側に組み、南部側にまわったテキサスを敵にまわして戦った [ROSENBAUM 1981: 42-45]。

グレゴリオ・コルテスの抵抗は1901年に始まり1913年まで続いた。発端は保安官とコルテスの会話を通訳した人の訳の誤りから生じたと伝えられる。コルテスと仲間の物語はコリードとよばれる二行連詩で歌われ民間に流布した [ROSENBAUM 1981: 45-49]。20世紀になってメキシコ系の民俗学者アメリコ・パレーデスにより収録され、『ピストル片手に——国境地帯のバラッドと英雄』 [PAREDES 1958] という本として出版された。北方で歌われたもの、メキシコ市で歌われたもの、といった風に種々の版があり、コルテスのイメージがふくれ上ってメキシコのフォーク・ヒーローになっていく様がよく伺える。ちょうど、米墨戦争時のアラモの戦いで戦死したディヴィ・クロケットやリンカン郡戦争時のお雇いガンマンのビリー・ザ・キッドがアングロの西部劇のヒーローとなっていたのと同じことである。

その後も小規模な抵抗が続いたが1915年の「サン・ディエゴ（テキサス）計画」とよばれるものが注目すべき最後のメキシコ側の反抗であった。この反乱計画にはメキシコの反動政治家ベヌスティアノ・カランサが関わり、メキシコ系に加えてインディアン、東洋人、黒人をも含む被抑圧者の共和内の設立が意図されたが、カランサの失脚と同時に運動は途絶えた [ROSENBAUM 1981: 49-52]。

最後に、ニューメキシコ州での抵抗運動をみていこう。同州ではスペイン系の人々が6万人も住み、緊密な組織をもった村落共同体をつかって定着していたので、アングロへの抵抗は静かに根強く続き、1960年代の市民権運動期の高まりを経て、現在まで及んでいる。

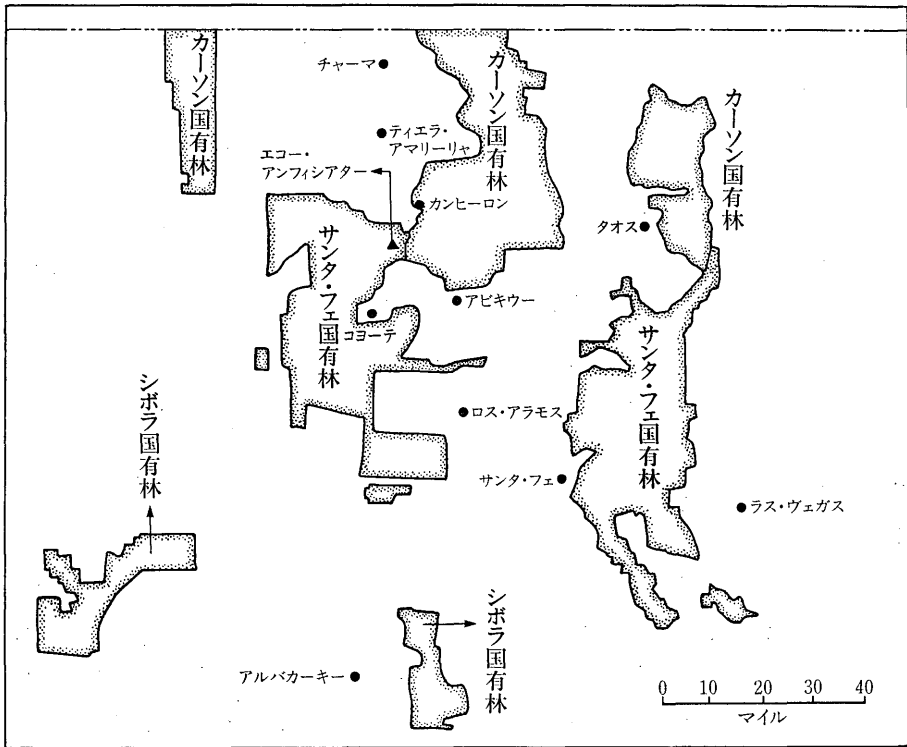
同州にアングロが公式に入ったのは1846年のことであるが、この頃から1880年代まではスペイン系の人々はアングロの妨害に会うことなく生活圏を拡大することができた。ニューメキシコ州北部の村人が耕地と放牧地を求めてコロラド州南部に入植したのもこの頃であった [DEUTSCH 1987: 13, 17]。ところが1880年代には状況が異なってきた。鉄道が入り、材木会社が操業を始め、石炭鉱が開かれ、商品作物をつくる農業が始まり、牧牛業が導入されると、スペイン系の人々の土地がアングロの投機の対象となり、ここに土地収奪の歴史が始まった。スペイン系の人々にとっては土地と権利を防衛する闘いの始まりであった。

ニューメキシコ州の土地問題については1980年代になって専門書が相次いで出版され [HALL 1984; ORTÍZ 1980; ROSENBAUM 1981; WESTPHALL 1983]、その全貌が明らかになりつつある。詳細については各研究書を参照されたいが、事の大筋は次のようである。スペイン、次いでメキシコが植民者に授与した土地（メルセデス・レアレス）は宅地と耕地に加えて共有地への権利を含んでいた。当時は個人で植民できる状況ではなく、リーダー格の植民者と何人かの追従者が共同で村を開く場合が多かったので、授与地は共同体に与えられたことが多かった。正確な測量のできない時代のことであるから、授与地の範囲を記すにあたっては自然の景観に言及する形で土地所有の文書が作成されていた。ウェストフォールの研究によると、スペイン時代では最初の土地授与は1693年に始まり1820年まで続くが、この127年間に114の個人と共同体へ授与が行なわれ、平均して一年に一件以下ということになる。一件につき認められた土地の規模も少なく、主としてタオス以南のリオ・グランデ河の支流の土地が多かった。この土地は農牧生活に適した土地であり、植民者の必要に応じて徐々に授与されたと判断できる。ところが、メキシコ時代（1821-46）になると、メキシコ人と結託したアングロや外国人に次々と大規模の土地授与がなされ、それがニュー

ーメキシコ北部にまで至り、土地の境界に法的根拠の定かでない例が多かった [WESTPHALL 1983: 36, p. 122 の地図]。

その後のアメリカ統治時代、特に1880年代以降は牧牛業、鉱山業、材木業が進展したため、アングロによる土地の投機的購入が続き、初めは北部の大型授与地が対象であったのが徐々にスペイン系の人々の小規模所有地にまで及んだ。測量監督本部は1854年に開設され、さらに個人所有地の権利確認のための法廷は1891年に創設され住民の権利を守るために動くはずであったが、実際にはサンタ・フェ・リングと称される州の政財界（スペイン系の有力者をも含む）と結託したアングロの資本家に有利なように事が運ばれた [WESTPHALL 1983 が詳細を伝えている]。

そのため、ニューメキシコの北部でも南部でも（地図3参照）スペイン系の人々の抵抗が起こった。北部ではマクスウェル授与地と称される1841年に認可されたコロラド州にまで至る巨大な土地が抗争的となった。この授与地はスペイン系の人々の放牧権やインディアンのバッファロの放牧地を侵害しているにもかかわらず認可され、



地図3 ニューメキシコ北部の国有林と関係市町村

(Peter Nabokov. *Tijerina and the Courthouse Raid*. Berkeley: Ramparts Press, 1969 より)

授与当初から問題が多かった。悶着の末、政治家が介入して1860年に法的権利が確認されたが、1870年には英国の資本家、次いでオランダの資本家に転売され、マクスウェル土地・鉄道会社が発足した。その後も会社とスペイン系の小土地所有者の間に争いが続いたが、1890年頃には法的には会社の勝訴が確定的になった [ROSENBAUM 1981: 68-90]。

次いで、テキサス州と境を接するニューメキシコ南部のリンカン郡ではサンタ・フェ・リングとテキサス資本の利害が対立し、リンカン郡戦争(1878-1880)といわれる抗争が続いた。テキサスから入ってきたアングロの牧牛業者とニューメキシコの牧羊業者が土地をめぐる争ったわけであり、両者の血なまぐさい闘いが続いた [ROSENBAUM 1981: 83-98]。

抗争が最も長びいたのはラス・ヴェガスを中心とするサン・ミゲル郡であった。この郡には10の授与地があり、いずれもアングロへの売却に際しては共同体成員の許可なく共有地まで売却され、スペイン系の人々の放牧と水利権がいちじるしく損なわれていた。その後も小土地所有者のスペイン系の人々は残った僅かの共有地を守りながら生活していたが、有棚の牧畜業にたずさわるアングロが進出し、土地を囲っていくと、脅威を感じ、柵を切りたおすなど実力行使に出た。やがて人々は団結して「白い帽子」(ゴラス・ブランカス)という秘密組織をつくり、白い覆面で顔を隠し、騎馬の一群となって柵を切断した。共有地を無視して土地を購入したアングロの柵がねらわれ、納屋や乾草に放火が続いた [ROSENBAUM 1981: 111-119; SCHLESINGER 1971: 87-102]。この「白い帽子」は約1500人のメンバーを持ち、「労働の騎士達」(ナイツ・オブ・レイバー)というフィラデルフィア起源の労働組合のニューメキシコ支部の支援をうけ、支部長のファン・ホセ・ヘレラが「白い帽子」のリーダーであったと推測された [ROSENBAUM 1981: 120-123; SCHLESINGER 1971: 103, 113]。運動は1890年の夏まで成功を納めた。しかし、この頃から合憲的政治活動に移っていく必要が高まり、「白い帽子」への支援は統一民族党(パルティード・デ・プエブロ・ユニード)への票となり選挙で大成功を納めた。しかし、豊かな政治家と貧しい一般人との落差は埋めがたく、加えて党派心と私欲が災いとなって政治的效果を上げることができず、統一民族党は1894年には勢力を失った [ROSENBAUM 1981: 125-145; SCHLESINGER 1971: 123-126]。

授与地についての大方の法廷闘争もアングロ側の勝利に終わり、共有地の概念が否定されてしまった [ROSENBAUM 1981: 99-139]。そして、1899年にサンタ・フェ国有林、1906年にはシボラ国有林とカーソン国有林が設定されて(地図3参照)、ス

ペイン系の人々の放牧地をいちじるしく制限してしまった。さらに、鉄道敷設のために土地が接収されたことも放牧地の縮小をもたらした [SWADESH 1974: 70, 80-89, 157, 204]。

上記のような状況の下でスペイン系の人々の共同体は崩壊の道を辿りつつあった。農牧生活の基盤であった共有地は手放されていく場合が多かったし、賃金労働に依存せず生活できる村は極めて少なくなった。最近のドイツの研究 [DEUTSCH 1987] で明らかにされたことであるが、スペイン系の人々はニューメキシコやコロラド州で盛んになった材木業、鉱山業、砂糖大根生産や鉄道作業に賃金を求め移動労働者となって生計を立てる人が多くなっていた。こうして、彼等の生活が低辺の労働者のものとなり、アングロから差別視される対象となる過程が第一次大戦時まで続いた。

### 3) メキシコ移民の増加とその抵抗運動——20世紀初頭から1950年代まで

前節でふれたように、19世紀後半にもメキシコ移民はみられた。カリフォルニアのゴールドラッシュにはソノラ州からメキシコ人が参加したし、アリゾナのトゥソンには鉱山労働者として入ったし、テキサス州の牧牛業のブームの時には隣接するコアラウィラ州などメキシコ北部の州から大勢が出向いた。しかし、1890年の統計でみると、当時のメキシコ生まれの移民の数は7万5千人を越える程にすぎなかった。ところが、1900年には合衆国生まれとメキシコ生まれを含むメキシコ系の人々の数は38万1千-56万2千の間と推定されている [CORTÉS 1980: 702]。僅か10年間に人口が急増したことがわかる。

さらに、20世紀になるとメキシコ移民は爆発的に増えた [ACUÑA 1972: 121-152; CORTÉS 1980: 702-704; MOORE 1970: 20-30]。この頃から南西部には大資本が投じられ、人工灌漑が導入され、大農場経営(アグリ・ビジネス)が発展し、大量の労働者を必要としたため低賃金のメキシコ人未熟練労働者が歓迎された。木綿、果物、砂糖大根の収穫が主な仕事であったが、鉄道や鉱山で働く人もいた。1910年以前の移民は国境に近い北部の州から来たが、1910年以降はグアナフアト、ハリスコ、ミチョアカン、連邦州などの中央部の諸州からも移民が増え [ACUÑA 1972: 124; BUSTAMANTE 1975; DIEZ-CANEDO RUIZ 1984]、合衆国への出稼ぎが恒常的になる余兆を示した。ポルフィリオ・ディアス政権下にメキシコは合衆国その他の外資を導入し、メキシコの北部と中央部で資本主義の発展をみるが、逆に農民のなかには土地を失いプロレタリアート化する人口が増え、この人々が生活の糧を隣国に求めたわけであった。また、

メキシコ革命の動乱を避けて合衆国に渡る移民も多かった。

上の現象が移民の第一波とすると、第二波は第一次世界大戦時であり、戦時経済の好況に乗り、合法・非合法の移民が大量に入国し、この波は1921年まで続いた。

1930年代の大恐慌時代には移民は減少したが、第二次世界大戦後の1940年代には第三波が始まった。特に、1942年から1947年まではブラセロ（雇い人夫）と称される臨時雇いの労働者を送り込む計画が両国政府の間で決められ、この5年間に22万人のメキシコ人が入国した。ブラセロ計画は朝鮮戦争時の労働力不足を補なうために1951年に復活し、1959年には入国した労働者の数が45万というピークを迎え、1964年まで続いた。ブラセロ計画はこれで終わったが、その後もグリーン・カードを貰って臨時雇いの労働者として入国することは許可された。このように合法的に入国する者に加えて不法入国者も多く、河を渡って濡れて来ることからスペイン語でモハード、英語でウェットバックとよばれたり、国境にはりめぐらされた金網をくぐって来ることからスペイン語でアランプリスタともよばれた。こうして、時間がたつにつれ永住ビザを持つメキシコ系の人々が増え、1940年代にはメキシコ系労働者は南西部のみならず中西部の産業やサービス業にまで進出するようになり、移民制限を求める声が高まり、1950-55年には不法入国者の送還が強行された [ACUÑA 1972: 123-152; MOORE 1970: 29-30]。

上に明らかなように、メキシコ人移民や労働者の導入は合衆国の労働市場によって決定されており、メキシコ系の人々は本国よりは恵まれた生活を送れるとはいえ、合衆国では低辺の生活をよぎなくされた。この悪状況を改善すべく徐々に相互扶助組織がつくられ、労働争議や政治運動が企てられた。

相互扶助組織の多くは泡沫的であったが、1920年代にテキサスで中産階級を組織した LULAC（ラテンアメリカ市民の連盟）の活動が効果を生み、メキシコ系の人々の生活の改善とアメリカ社会への参入に努力が向けられた。労働組合はメキシコ系住民が最も必要としたものであり、1920-40年代にカリフォルニアやテキサスの農業労働者やアリゾナやニューメキシコの鉱山労働者の間で組織され、数々のストライキを打った。カリフォルニア州ではインペリアル・ヴァレーのメロン農園労働者のストライキ（1928年）、エル・モンテのイチゴ農園労働者のストライキ（1933年）、アーヴィンのディ・ジョルジョ農園労働者のストライキ（1947年）、テキサス州ではサン・アントニオのクルミむき労働者のストライキ（1938年）、ニューメキシコ州の鉱山のストライキ（1934年）、などが代表的なものとして挙げられる [ACUÑA 1972: 153-221; CORTÉS 1980: 708-711]。



アメリカの他の民族集団の例と同様に、第二次世界大戦へのメキシコ系の人々の参加は結果的に生活の改善につながった。今まで自分の生活圏を離れたことのない人々が軍隊に入って海外に派遣されたため、異国を知る機会にもなった。そして戦場から戻った後にG Iに与えられた幾つの特権を活用して生活を向上し、同時に同民族集団の地位の向上に努力する人が増えた。G Iフォーラムはテキサスの復員兵士のつくった組織であり、差別に抵抗し、民族集団の意識を改め、生活水準の向上に努めた。この頃、この種の団体が数多く組織され、徐々にではあるが効果をもたらした。また、この頃からメキシコ系住民の中で都市居住者が増え、都市バリオの問題が浮上してきた。1942年にロサンゼルスで起きたスリーピー・ラグーン事件にみられる警察当局の差別への抵抗や翌1943年にイースト・ロサンゼルスで起こったズート・スート（ひざまで届く肩幅の広い長い上衣と、すそでくくっただぶだぶの長いずぼんからなる服で、戦時中にメキシコ系の若者の間で流行した）の反乱にみられるアングロ系兵士と海兵隊への抵抗は都市での生活不安の増大を示す例として挙げられる [Acuña 1972: 202-208; Romo 1983: 166]。

このように、1940-50年代にかけてカリフォルニアやテキサス州で小規模ながら積極的な政治運動が展開され、折から黒人の復権運動が上り潮に乗りつつあり、新たな動きが期待されるところで1960年代に入った。

以上、後程チカーノと称される民族集団が生成し現在に至る過程を時代順に捉え、それから各時代における各州の動向を紹介してきたが、その結果、州ごとの状況の差がいかに大きいか明らかである。そこで、各州の特徴をここで要約しておくのが良いだろう。

カリフォルニア州ではゴールドラッシュと豊かな土地が災いして、アングロの急速で膨大な流入をみた。そのため、大土地所有者で豊かな生活をおくっていたカリフォルニアは短期間に没落し、19世紀末には早くも都市バリオが姿を現わした。20世紀になると、アグリ・ビジネスに吸収されたメキシコ人労働者の数は膨大で、社会の低辺を形成した。このような背景があるため、1930-40年代に抵抗運動やストライキが顕著に起こり、改革の急運をもち上げながら1960年代に至った。

アリゾナ州では19世紀半ばまでは少数のメキシコ人居住者が駐屯兵との関わりで居住していたが、その後の同州の動向に影響を残すことはなかった。19世紀末と20世紀に、多数のメキシコ人労働者が入ってきたので、これらの比較的新しい移民が同州のメキシコ系人口をつくっている。

コロラド州の南部には19世紀末にニューメキシコ州北部から入植したスペイン系の人々がいるので、後述するニューメキシコ州と同様の状況がある。他の地域では、メキシコ系の人口がほとんどで、移動労働者や都市バリオの問題を抱えている。

ニューメキシコ州では16世紀以来リオ・グランデ河沿いにスペイン系の人々が定着し、農牧生活を営み結束の良い共同体を形成してきた。合衆国領となってから相続く土地収奪におびやかされ、貧困化しつつも生存し続け、現在に至っている。現在では、同州にはメキシコ系の人口も多いが、今なおスペイン系の存在がこの州の文化的・政治的特徴を形づくっている。

テキサス州ではリオ・グランデ河沿いだけにメキシコ系の定着農民の共同体が形成されていたが、接触当初からアングロからの圧力が強大であった州だけに、ニューメキシコ州とは異なり、伝統的なものは押しつぶされた。米墨戦争はテキサスに始まるが、それ以後、特に20世紀に入ってからメキシコ人が多数流入しており、彼等へのアングロの偏見と差別は極めて強い。

このように、州ごとにメキシコ系の人口（スペイン系を含む）が辿って来た道が異なるので、民族復権運動の争点と方法も州ごとに異なってきて然るべきなのである。このことは1960年代のチカーノ運動に明確に認められることであり、次章にて検討していこう。

## 2. 1960年代の復権運動

1960年代にはメキシコ系民族集団の復権が叫ばれ、ケネディ政権（1961-63年）とジョンソン政権（1963-69年）の下での公民権運動の高まりに乗って、黒人のブラック・パワーやインディアンのブラウン・パワーと連繫を保ちながらチカーノ運動が浮上してきた。チカーノの語源は明らかではないが、文化的ルーツを認識しアイデンティティの確立を求めるメキシコ系の人々のことを示しており、この人々が志す復権運動のことをチカーノ運動とよんでいる。既にのべたように、メキシコ系の人々の生活状況は州ごとに特徴があったので、それに応じて政治的指導者が現われた。カリフォルニア州では農園労働者の組合活動を推進したセサール・チャーベス、コロラド州ではデンヴァー市のバリオの青年の生活の改革をめざしたコーキー・ゴンサーレス、ニューメキシコ州では土地返還運動を起こしたライエス・ティヘリナ、テキサス州では郡レベルの政治への参加を提唱したホセ・アンヘル・グティエレスが代表的なリーダーとして浮上した。私はこの4人の内ティヘリナとしか会っていないが、文献でみる

と、各々個性的で、その主張と運動方法がいかにこの民族集団の人のものらしい。各リーダーとその運動についてはジャーナリスティックで断片的な文献しかなく、主な事実を伝えることしかできない。

1) セサル・チャーベス、コーキー・ゴンサーレス、  
ホセ・アンヘル・グティエレスの活動

カリフォルニア州のデラーノに本拠を置き同州の農園労働者の組合運動に尽力したセサル・チャーベス（以下の記述は [Acuña 1972: 176-183, 224-225; FITCH 1974: 360-365; STEINER 1970: 310-323]）に対してはアングロの評価が一番高い。チャーベスは1927年にアリゾナ州ユマに生まれ、10歳の時に父親は土地を失い、移動労働者となり、彼は各地の学校を転々とし、小学8年生になった時に学校をやめて農園で働くことになった。その後、1940年代に家族はカリフォルニアのサン・ノゼに来て最低辺のバリオに住みついた。1939年頃に父親が組合活動を始め、セサルも影響されて19歳で NAWU（農業労働者国民ユニオン）に参加し、組合活動の難しさを学んだ。また当時、カトリックのマクドネル神父と親交を結び、社会事業にも目を開かされた。それから10年間ほど同州のコミュニティ組織者として働き、草の根の活動の仕方を学んだが、心に懸っていた農園労働者の組合運動に転じ、デラーノに事務所を持ってメキシコ系、フィリピン人、黒人、日本人の労働者を組織した。

1962年に彼が組織した NFWA（農園労働者国民連合）の組合員は1700人を数えたが、この力だけではアグリ・ビジネスに対決できないと判断し、公民権運動関係者と教会勢力に助力を求めた。チャーベスの非暴力の姿勢が賛同を得て協力者が増えた。チャーベスは女性、特に母の力を重要視し、教会に信頼を寄せていることをジャーナリストとのインタビューで明らかにしている。デラーノの事務所の近くに祭壇をつくり、ストライキの行進にはグアダルーペの聖母の絵を書いた旗をかかげた。このようにメキシコ的な宗教シンボルを人々の統合のために使ったが、組合運動の進め方は現実的であった。ボイコットなど強行手段をとるべき時はとり、かたやストライキの成功のためには妥協も敢えて行ない、NFWA と他の組合を統一してより大きな UFWOC（農園労働者統一組織委員会）を組織して、60年代にはカリフォルニアの各地で農園ストライキを勝ちとった。

1965年頃にこれらのストライキの成功が全国的に報道され、ロバート・ケネディを初めとする政治家がデラーノに居るチャーベスを訪問することが多くなったが、その頃からチャーベスは多くの問題を抱えるようになった。組合員内にみられるメキシコ

系とフィリピン系の軋轢，不法入国者の取扱い，農園の機械化による失業の増加，組合組織の官僚化，などであった。またチャーベスの指導力を都市のバリオの組織化に役立てるよう望まれるようになり，この要請にどう対応するかといったことも問題になってきた，と報告されている。

寡黙で辛抱強く，時として宗教的なセサル・チャーベスと対照的に，コロラド州のリーダーであるコーキー（正式にはロドルフォ）・ゴンサーレス（以下の記述は [ACUÑA 1972: 241-244; STEINER 1970: 378-392]）は明るいイメージの活動家であった。10代には彼は人気の高いボクサーで，チカーノの若者のアイドルであった。しかし更衣室でガルシア・ロルカの詩を読んだボクサーはまもなくリングを去り，チカーノの復権運動に身を投じ若者に夢を与えた。

コーキー・ゴンサーレスはデンヴァーのバリオに生まれた。父はメキシコ移民で農園や鉱山で働いた。彼も10歳の時から砂糖大根畑で父と一緒に働いた。春と夏は農園でくらし，秋と冬はデンヴァー市のバリオに戻ってくるという生活であった。屠殺場でアルバイトをして高等学校を卒業したが，貧から逃れるためにボクサーになったのだった。ボクサーをやめてから事業家に転じたところ成功し，政治運動にも参加し始めた。29歳でデンヴァーの民主党の地域長となり，1960年のケネディ大統領選にはコロラド州の協力者として大活躍した。数々の委員会に名を連ねたが，その内，政府の貧困対策に失望した。メキシコ系の民族票を取るために民主党に利用されていることを悟り始めた頃，貧困対策用の資金を盗んだという疑いをかけられた。疑惑は晴れたが，これを契機に政界から身を引いた。

彼はバリオに戻り「正義のための十字軍」(クルサーダ・パラ・フスティシア)の運動を開始した。チカーノとアングロの有志の寄付を得てデンヴァーの下町にある古い教会を買い取り，チカーノ文化センターにした。州や国の介入をさけるため公費を受け取らず，人々による自主管理を大切にした。1968年の夏には同センターでチカーノ青年解放会議を開き，チカーノの歴史的遺産をたたえアングロ支配下にあるチカーノの独立をよびかけた。

詩人の心を失わぬコーキー・ゴンサーレスは1967年に『私の名はホアキン』[GONZÁLEZ 1967] を発表し，アステカやマヤの歴史から歌い始め，若者が文化的アイデンティティを大切にしていなくては雄々しく生きることを説いた。「私はホアキン。グリngo(アメリカ人のこと) 社会の渦に巻きこまれ，規則に混乱を覚え，態度で馬鹿にされ，手練手管で抑圧され，近代社会に破壊された。私達の父達は経済的には敗れたが，文化的には生存した」と歌い，なお一層の努力を同民族集団の人々に求めた。この小

な詩集は60年代のチカーノの若者のバイブルとなった。

テキサス州ではホセ・アンヘル・グティエレス（以下の記述は [ACUÑA 1972: 233-237]）がチカーノの政治参加をよびかけた。最初、彼は学生を集めて MAYO（メキシコ系アメリカ人青年組織）をつくり、青年の意識の変革を目的として過激な発言をくりかえしアングロの反発を買っていた。そして1969年にクリスタル・シティの高等学校でメキシコ系の学生に対する差別が問題になったのを契機にメキシコ系の組織化を試み、統一民族党（ラ・ラッサ・ウニーダ）を創設した。同党の活動はクリスタル・シティをはじめテキサス各地の教育委員会に代表を送りこむことから始まり、物資の共同購入や差別的なアングロ企業のボイコットに向かった。さらに、郡レベルの政界に代表を送りこむべく努力したが、同州で重きをなす石油業界の圧力がかかり、必ずしも成功を納めていない。その後、ホセ・アンヘル・グティエレスと協力者は合衆国の各地を周って統一民族党の成立をよびかけた。同党の活動は1970年代に各地に広まった。

## 2) ライエス・ティヘリナとアリアンサの運動

ニューメキシコ州におけるティヘリナの運動については上記の三者よりも紙幅を要する。第一には、彼の運動が千年王国論的と称されるように [SWADESH 1968]、一見したところ非現実的で不可解な面が多く、説明を要するからであり、第二には、ニューメキシコ州で調査をした私の同州の政治運動への関心が深いからである。ティヘリナの過激な活動は刑事事件となって合衆国全土に報道されたので、まずその事件の経緯をのべ、運動の争点を明らかにし、ティヘリナのリーダーシップの質を問い、動員された人々の数と種類を概観することしよう。

若干の文献 ([BLAWIS 1971; NABOKOV 1969; STEINER 1970: 50-96; SWADESH 1968]) から判断すると、ティヘリナと協力者がまき起こした事件の前後の状況は次のようである。

1950年代末からニューメキシコ州北部、特にチャーマとティエラ・アマリーリャ（地図3参照）の一部のスペイン系の人々の間で土地をめぐる不満が高まり、これをうけて1963年にはテキサス州出身のライエス・ティヘリナを指導者とするアリアンサ（授与地に関する連邦同盟）と称するグループが結成された。アリアンサの争点は1848年のグアダルーペ・イダルゴ条約に関わっている。同条約により合衆国統治下でもメキシコ系住民の財産は守られると明文化されたにもかかわらず、個人所有地のみならず共有地までがアングロに売却されており、条約に違反することなので、返還さ

れるべきである、と主張したのであった。

1966年になるとアリアンサの活動は活発になった。7月にはアルバカーキー市にあったアリアンサの本部から州都サンタ・フェまでハイウェイを行進して、州知事に運動の目的を伝えた。さらに、10月には国有林のなかにあるエコー・アンフィシアターのキャンプ場を占拠してサン・ホアキン・デル・リオ・デ・チャーマ授与地という1806年にスペイン政府より認可された土地を子孫に返すべきであると宣言した（この授与地については後述する）。

翌1967年の5月にはニューメキシコ州北部で放火や鉄柵の破壊が続き、アリアンサの成員の仕業ではないかと考えるアングロ系住民が多くなった。6月にはアリアンサの人々がコヨーテ村で集会を持っているところを警察が襲い、ティエラ・アマリーリャの郡役所の牢に入れられてしまった。ところが、7月5日にこの郡役所をアリアンサの成員が襲撃し拘留中の仲間を解放してしまった。州警察が出動し、この事件は全米にテレビで報道された。同月10日にティヘリナはこの事件の責任者として逮捕され、しばらく拘留された。

しかし、同年のティヘリナの活動は華々しく、8月にはシカゴに出かけ「新しい政治のための国民会議」に参加し、マーティン・ルーサー・キングと会い、全国レベルの公民権運動組織への接近をはかった。また同年10月にはアルバカーキー市でアリアンサの年次総会が開かれ、グラック・パワーの代表、ホピ・インディアン代表、コロラド州のコーキー・ゴンサーレスが参加し、アリアンサの運動が拡大したかの感を与えた。

翌1968年2月になると、アリアンサがティエラ・アマリーリャの牢獄を襲撃した時にティヘリナを目撃したと証言した看守ユーロヒオ・サラサルが何者かに殺害され、アリアンサに疑惑の目が向けられた。この騒動にもかかわらず、この頃のアリアンサの活動は好調で、5月末から6月初めにかけてはワシントンで「貧しき人々のキャンペーン」に大勢が参加して、公民権運動の高まりを一層盛り上げた。

しかし、1969年になるとティヘリナは州政府が起こした訴訟に応じざるをえなくなり、指導者を失ったアリアンサの運動は下火になっていった。

以上がアリアンサの活動の大筋であるが、何故人々は土地を争点に選んだのだろうか。

既にのべたように、1950年代末からティエラ・アマリーリャの住民は共有地をめぐる問題を抱えていた。そもそも、ティエラ・アマリーリャはアビキウーの分村であった。1832年にアビキウーの若干の家族がマヌエル・マルチネスを代表者として、

当時サンタ・フェにあったメキシコ政府代表部に土地授与を申請して認可された土地であった。共同の申請であり、共有地もあったが、マルティネス自身はまるで個人所有地のように扱おうとした節が文書の記録から読める、とされている。そこで、アメリカ統治が始まると、1856年には、マルティネスの息子はサンタ・フェの土地登記所にティエラ・アマリーリャの個人所有権を申請したところ、詳しい調査もなく認可されてしまった [WESTPHALL 1983: 127-131]。その内、土地買占めで悪名の高い T.B. カトロン の投資の対象となり、広大なティエラ・アマリーリャ授与地が文書上は売却されてしまった。ところがマルティネス家と共に土地を授与された開拓者の子孫は各人の家と農地に加えて共有地の所有権を持っていたので、19世紀末から訴訟を起こしていた [WESTPHALL 1983: 224-229]。とはいえ、時代の流れには勝てず、人々は徐々に個人所有地と共有地を手放し、北部のチャーマ付近に放牧可能な共有地が僅かに残っていた。これがサン・ホアキン・デル・リオ・デ・チャーマ授与地である。ところが、1951年になると、ニューメキシコ州南部のリンカン郡に住むテキサス州出身のビル・マンディがこの土地を購入し柵で囲い始めた [GARDNER 1970: 48-49]。最後の放牧地を失ったティエラ・アマリーリャの住民は窮地に追いこまれた。この状況を打開し、イスパーノの不満を社会的に表現してくれる指導者としてティヘリナが選ばれ、土地返還をスローガンとしたのであった。

果たして土地返還はティヘリナとアリアンサの人々にとって有効な争点になりえたのだろうか。歴史家ウェストフォールのように、スペインやメキシコ政府が住民に授与した土地についての合衆国の法律上の処理には幾多の不正と違反があって法律的に厳密に調査すれば土地返還を申し立てられる人もいるはずだ [WESTPHALL 1983: 193-216, 237-268]、と考える人もいるが、現実には訴訟に費用がかかりすぎる。そして、ニューメキシコ州の古文書に詳しい歴史家マイラ・ジェンキンスが指摘したといわれるように、土地紛争の多くは1854年から1890年までの間には合衆国測量長官の役所で処理され、さらに1891年から1904年にかけては共有地への権利を判定する法廷がつくられ、諸問題が法的には決済されてしまったので [STEINER 1970: 50]、この過去を掘り起こすのは至難の業である。

上のような現実があるにもかかわらず、人々は抵抗を志し、ティヘリナをリーダーに選んだが、彼はいったいどんな背景をもった人間であり、果たして人々の期待に応えられる指導力を持っていたのだろうか。

ティヘリナは1927年の大恐慌時代にテキサス州でメキシコ系の移動労働者の子として生まれた。家族はテキサス州で綿をつみ、コロラド州で砂糖大根を刈る移動生活

をしたので、ティヘリナは3年間だけ学校教育をうけた。しかし、13歳の時、聖書に接し、読み書きを独学で身につけ、19歳でエヴァンジェリストの聖書学校に通い、その後、ペンテコステ派の「神の集いの教会派」の説教師になり、家族共々南西部の町々を歩き説教をした。この頃の語り口はアリアンサのリーダーになってからの彼の演説の口調となった。1976年の夏、私がアルバカーキー市で会った時も、聖書からの引用の多い弁説が長々と続き、運動の主旨と方法を直截にのべる表現はほとんどなかった。

ティヘリナを土地問題に目覚めさせたのはアリゾナ州での経験である。彼の自伝『土地をめぐる私の闘い』[TIJERINA 1978]によると、1956年にティヘリナと仲間の7家族はアリゾナの砂漠に160エーカーの土地を共同で購入し、「平和の谷」と称し、共同生活を始めた。ティヘリナ一同にとっては最初に手に入れた土地であり、定着の場にするはずであった。綿花つみに精を出し、皆の収入を集めて家屋を整備しつつあった。ところが「平和の谷」に学校をつくったところ、何者かに放火されてしまった。さらに、ティヘリナが囲まれた不法入国のメキシコ人の問題がこじれ、近隣のアングロ系住民からの圧力が高まった。結局、ティヘリナ一同はアリゾナを離れざるをえなかった。

上のような29歳の時の経験が同じく土地問題で悩むティエラ・アマリーリャの人々への共感となって現われた。自伝によると [TIJERINA 1978: 33], ティエラ・アマリーリャの村は1945年以降3回もティヘリナを招待している。そして、1956年にティヘリナ一同が同地に住みつき、同村の土地授与について議論を重ね、現状を把握した上で既にのべたような抵抗運動を展開したのであった。

ティヘリナ自身は指導者として打ち出した争点に具体的な解決をもたらす策を持っていたらどうか。グアダルーペ・イダルゴ条約の文書を実際に見たり、メキシコ国内の援助を得るために7回もメキシコ入りしたが [TIJERINA 1978: 43-65, 87, 96, 102, 105], 古文書館で新しい資料を掘り当てたわけでもなく、メキシコ政府や要人の支持を得たわけでもない。彼の旅行の経費はティエラ・アマリーリャの支持者達が捻出し、不足分はティヘリナがテキサスの農園で働いて得た資金でまかなわれている。そして、1966年にはスペインのセビーリアにあるインディアス古文書館にまで足をのばしたが [TIJERINA 1978: 120-123], 古文書を読む訓練のない人が接近できる対象ではないので、彼が確実な資料を得たとは思われない。さらに、指導者としても支持者から全幅の信頼を得ていたわけではない。アリアンサの運動に好意的な研究者スワデッシュでさえ、ティヘリナがテキサス生まれである上にプロテスタントであった



ことがニューメキシコのスペイン系の人々に不信感を与え、ティヘリナに十分な運動資金を渡さなかった、と指摘している [SWADESH 1982: 263]。

このように争点の研究が不十分で、指導者に対しても不満がありながら、どのような人々がティヘリナとアリアンサの運動に参加したのであろうか。

運動の中核を成したのはティエラ・アマリーリャの住民とティヘリナ兄弟やアリゾナで共同生活を送っていた人々であった。これらの人々を中核にして参加した人の数は1万人程だったといわれているが、人数は確かではない。ニューメキシコ州で政治運動が問題になる時は必ずペニテンテ（十字架上のキリストをまつる宗教結社）の参加が噂されるが、アリアンサの運動へのペニテンテの動員はなかったようである。ティヘリナが最初にティエラ・アマリーリャの人々と接触した時、ペニテンテの協力があったと彼はのべているが [TIJERINA 1978: 58]、以降のアリアンサの活動にペニテンテが組織的に介入した様子はない。1960年代にはペニテンテの数も減り、集会所であるモラダの売却例が多くなり、ペニテンテが政治力になるだけの結束はなかったのである [HOLMES 1982: 245-246]。それでも、アリアンサの活動に多くの人々が興味を示し、デモにも大勢が参加したのは同州において人々の土地が暴力的な力の論理で収奪されていったことへの怒りを持った人が多かったからであろう。

ティエラ・アマリーリャ事件が一段落ついてからティヘリナは釈放されたが、1978年頃までは政治運動を禁止された。1976年に私がアルバカーキー市の彼の自宅で会った頃はティヘリナは自伝を執筆中であり、『土地をめぐる私の闘争』と題され、1978年にメキシコの大手出版社から出版された。その後、北部のコヨーテ村に移住し、再びサン・ホアキン・デル・リオ・デ・チャーマ授与地関係者と活動を共にしていた。この時点ではティヘリナはカトリックに改宗し、土地の生活に溶けこもうとしていた。しかし、その政治力は弱体化し、1979年の9月にカンヒーロン近くで反核運動が起こり、それに参加しようとした折にリオ・アリーバ区の統一民族党から拒否されている [The New Mexican. July 20, 31, 1979; Newsweek. Sept. 24, 1979]。

しかしながら、一方ではサン・ホアキン問題は好転していた。1979年3月に同授与地に関する文書が発見され、現在の国有林の一部が元々は同授与地に属した共有林であったことが明らかになり、ニューメキシコ州選出の下院議員でスペイン系のマヌエル・ルーハンが法務局に審議を始めるように要請したからであった [The New Mexican. Sept. 13, 1979]。その後、この問題がどのような展開をとげたかについて、残念ながら私は資料を持っていない。

上にみた4人のリーダーによる運動に加えて、各州で広まったものに青年層の政治・文化面での覚醒運動があった。イースト・ロサンジェルスで始まった「ブラウン・ベレッツ（茶色の帽子）」が典型的であるが、同時にどの州でも数々の青年組織が出現し、教育上の差別など身近な問題に取り組み、また文化的なルーツを求めて出版活動や小劇場の開催に努力した。移民の第三世代に当たる青年達は同化に励んだ二世とは異なり、自らの発見に努力した。全国的なこの動きを受けて、1969年には「アストラノのチカーノ学生運動」(MECHA) が結成され、チカーノがアステカ文化の揺籃の地から由来し元々は南西部の土着民であった、と声明した。こうして、アングロ系アメリカ社会に同化せず、自らのルーツに誇りを持って生きようとする姿勢が高学歴の青年層から出てきたわけで、メキシコ系の人々に大きな影響を与えた [CORTÉS 1980: 718; GONZÁLEZ 1969: 186-195]。

保守的なカトリック教会にもチカーノ運動の影響は広がった。チカーノは全国のカトリック人口の27パーセント(1977年)を占め、南西部のカトリック人口の3分の2に当たるので、1977年にはメキシコ系の司教が増やされ、チカーノ問題への教会の配慮がみられるようになった。チカーノ運動を支援する神父も出てくるようになり、南西部のカトリック教会は活性化されつつあった [CORTÉS 1980: 718]。

しかし、1970年以降ではチカーノ運動の急速な躍進は期待できない。1975年にヴェトナム戦争が終わり、世論は保守化し、60年代の市民運動の高まりは昔日の姿となった。ところが、その頃に問題にされた現実は今でも残っている。教育水準の低さ、言語のハンディキャップ、参政率の低さ、不法入国者など、次々と問題が挙げられる。しかし、草の根レベルの人々の努力で徐々に改善が試みられ、民族文化の復興も企てられるようになった。この状況については私はニューメキシコ州のアルバカーキー市とタオスの町で調査し既に報告書等を出したので [黒田 1978, 1982, 1984, 1985]、ここで繰り返さない。

### 3. ヒスパニック連合の動向

前章の記述から明らかなように、チカーノの間にさえ団結が困難な現実があるにもかかわらず、70年代から、スペイン語を話す人々をまとめて一つにする「ヒスパニック連合」が少しずつ進められている。それは、チカーノにとっては一步前進の事実なので、まずヒスパニックとは何かをのべ、その政治活動の動向をさぐってみよう。

そもそも「ヒスパニック」(hispanic)とはスペイン語系の人々ということであり、

メキシコ系（スペイン系を含む）、プエルトリコ系、キューバ系、中央アメリカの人々、南米からの人々、スペイン人を包含し、総計で1460万人（全米人口の6.4パーセント）になる [VIGIL 1987: 2-3]（年代は明記されていない）。このヒスパニックの人々の間にまとまりがあるかというとはなく、1970-80年代になって初めて必要にかられて時折、政治上の効果のために連繫しているのが現実である。というのは、ヒスパニックを構成している各民族集団の移民経験が異なり、なかなか簡単に一致団結できないのである。

ヒスパニック人口の半数以上を占めるメキシコ系（スペイン系を含む）のことについては既にのべたので繰り返さない。これに次いで多数を占めるのはプエルトリコ系である。プエルトリコは米西戦争後、1898年に米国領となり、以降50年に渡って植民地となったが、1912年にプエルトリコ人は合衆国の市民権を与えられ、1952年には合衆国の連邦となった。この間、合衆国の資本により島の資本主義化が進み、自力のない植民地型福祉社会になってしまった。一部のインテリが独立運動を起こそうとするが、一般人は独立を喜ばず、島で生活が成り立たない場合や、より良い生活を求める場合には合衆国に出稼ぎに出て、市民権を持っている特権を行使して、多くの人々がそのまま居残ってしまう。1980年におけるプエルトリコ系の人口は200万以上で、ヒスパニック総人口の13.8パーセントに当たる。この内、86万552人はニューヨーク市に住み、特にイースト・ハーレムとローアー・イースト・サイドに固まっている。生活はニューヨーク市の経済状況に左右され、未熟練、半熟練労働者の多いプエルトリコ系は収入が低く、住宅に恵まれず、失業して生活保護を受ける率が高い。しかし、80年代になると専門職の人も来るようになり、進取の気風のある人はニューヨークを離れるようになり、ハートフォード、シカゴ、ヌワーク、ボストン、フィラデルフィア、クリーヴランド、ロサンジェルスにプエルトリコ系のコミュニティが現われた。なお、プエルトリコ系は数々の大学を持ち、ASPIRA（プエルトリコ系首席役員協会）など多くの相互扶助組織を持ち、政治的には民主党支持である [GANN and DUIGNAN 1986: 69-93, 194-195]。

キューバ移民はバティスタ政権時代には1万5千人程にすぎなかったが、1961年にカストロ政権がマルクス・レーニン主義を表明して以降、避難民として大挙して入ってきた。CIAの援助を得てピッグズ湾に侵攻する計画がキューバ人の間で進められたが、ケネディ大統領の支持を最終的には得られず、計画は頓座し、これ以降は避難民は移民と化した。1980年にはキューバ移民は80万3226人で、キューバ本国の全人口の10パーセントに当たり、ほとんどがマイアミ市とフロリダ半島の諸都市に住んでい

るが、ウェスト・ニューヨーク、ジャージー・シティ、ヌワーク、ブリッジポート（コネティカット）、ロサンゼルス、シカゴにも拡大している。労働者層に加えて、専門職の中産階級の移民が多く、カスタロ政権でさえ人材の流出に苦慮しているといわれる。キューバ移民の多くはケネディのいわゆる「裏切り」の後は民主党離れを示し、共和党支持者が多くなっている [DIDION 1987; GANN and DUIGNAN 1986: 94-111]。

カリブ海ではプエルトリコとキューバ人に次いでドミニカ共和国からの移民が多い。1960年代以降の移民がほとんどで、1980年代の初頭で総計30-50万人が合衆国に入ったと推定される。主としてニューヨークに住み、特にマンハッタンの北半分とクイーンズのコロナ・ジャックソン・ハイツ地域に固まり、プエルトリコ人と住み分けを示している。また、ニューヨーク市周辺の産業都市にも拡大しているが、マイアミにも多い。ドミニカ本国の人口の10パーセントが合衆国に住んでいるとされ、生活状況はプエルトリコ人と似ている [GANN and DUIGNAN 1986: 114-118]。

中央アメリカではエル・サルバドル、パナマ、グアテマラ、ホンデュラスから移民がみられる。本国の政情不安や人権侵犯が移民をつくってしまう要因である。ちなみに、1983年までにエル・サルバドル移民は50万に達し、本国の人口の10パーセントに当たる。この内の20-30万がロサンゼルスに住み、エル・レスカーテ（南カリフォルニア全キリスト教会会議）の援助を得て、定着の道を模索している [GANN and DUIGNAN 1986: 118-119]。

南米ではチリ、アルゼンチン、ウルグアイ、コロンビアなどからの移民が多い。概して、教育に恵まれ、専門職につける人が多い。特にニューヨーク市に住むコロンビア人は生活程度が高く適応に成功しているといわれる [GANN and DUIGNAN 1986: 118-125]。

上記の概括から明らかなように、ヒスパニックの内訳は種々様々なので、一丸となって政治活動を進める状況ではない。それでも、市町村、郡、州レベルでは民族票を集めることは可能であり、チカーノの多い南西部諸州では成功しているし、キューバ人の多いマイアミでキューバ系プエルトリコ人市長が出たり、プエルトリコ系の多いニューヨーク市で同民族集団が市政に大きな影響を与えたりしている。またプエルトリコ人研究者パディーリャの報告によると [PADILLA 1985: 84-118]、1970年代の初めにはイリノイ州のシカゴ市でプエルトリコとメキシコ系住民が「就労のための共闘連合」を組織し、イリノイ・ベル電話会社とジョウエル・ティーという食品会社を相手どって雇用の平等を訴え、スペイン語を話す労働者を両会社に就労させることに

表1 ヒスパニックの政治参加 1985年

	数	パーセント
連邦レベル		
上院議員	0	0
下院議員	11	2.5
州レベル		
知事	1	2.0
行政官	4	—
立法府議員	115	—
地方レベル		
郡役人	292	9.15
市町村役人	1,041	32.6
警察・裁判官	527	16.5
教育委員会	1,212	37.9

(Maurilio E. Vigil. *Hispanics in American Politics*. University Press of America, 1987, p. 88 より)

成功した例もある。

連邦レベルになるとスペイン系の人々の多いニューメキシコ州を除いてはヒスパニックの代表を出すことは困難であった(表1)。ところが、1970年代から80年代の初頭にかけてヒスパニックの票の力が目立ち始め、センサスでもヒスパニック票という言葉が使われ始めた。1982年には40の下院議員選挙区が20パーセント以上のヒスパニック人口を持つようになり(ニュージャージー1, アリゾナ1, ニューヨーク3, イリノイ2, フロリダ4, カリフォルニア17, ニューメキシコ3, テキサス9), 7つの選挙区ではヒスパニックが絶対多数を占めている(ニューヨーク1, フロリダ1, テキサス5) [GANN and DUGNAN 1986: 224]。前者の選挙区ではヒスパニックは大勢を左右できるし、後者の選挙区では大勝できるはずである。ところが、この予想どおりに事が運ばないのはヒスパニック連合が弱いことやヒスパニックの投票率の低いことに加えて、候補者の成熟度が充分でないために一般のアメリカ人の票を得られないという現実がありそうである。

連邦議会の議員と並んで連邦レベルでヒスパニックのために活動できるのは大統領指名の特別職である。ヒスパニックを最初にとり挙げたのはニクソン大統領であるが、最も積極的にヒスパニックを採用し政策面で効果を納めたのはカーター政権であった。ヒスパニック関係部門についての大統領付き特別顧問にはエステーバン・トーレスが指名され、同氏は後程カリフォルニア選出の下院議員となり、この人が1986年の中曽根康弘元首相の黒人やヒスパニックへの差別発言に抗議したヒスパニック議員連盟の

リーダーなのである。レーガン政権下でもヒスパニックが何人か特別職についたが、票集めのための政治色が強い、と評されている [朝日新聞 1986: 9月24日, 27日, 10月4日 VIGIL 1987: 71-75]。

数の割には政治的に成功しにくい現実を前にして、ヒスパニック内部の民族差を越えて協力しあおうとする動きが出てきた。第一に、1977年にはヒスパニック議員連盟 (CHC) が組織された。創設者はニューヨーク選出のプエルトリコ系下院議員のヘルマン・パディーリョで、全米のヒスパニック集団の統一と団結を目的とした [VIGIL 1987: 65]。1983年には140人の成員を持ち、シンプソン・マツォリ法案 (移民の抑制法案) を廃業にもちこむのに努力し、以降もラテンアメリカ諸国との友好のために発言しているが、反対することに主力が費やされ積極的代案を提出できない、と批判されている [GANN and DUIGNAN 1986: 225, 230]。第二のヒスパニック組織はラティノ選出・指名役職者の国民連合 (NALEO) で1979年に組織され、政治色の強い公的資金をさけ私的組織の資金を頼りにして運営され、ヒスパニックの投票登録、ビジネス、法案などに関心を示している。第三は、1983年に結成された「ヒスパニック・フォース84年」と名づけられた組織で、ヒスパニックの投票を連邦レベルの政治に反映することが目的で、ニューメキシコ州の知事トニー・アナヤの指導の下に組織されたが、民主党の利益と結びつきすぎる、と批判されている [GANN and DUIGNAN 1986: 225-226]。

上の説明から明らかのように、ヒスパニックを統合する組織は1970年代後半から80年代の初めにかけてつくられたところであり、その政治的効果が発揮されるにはこれから何年かの年月がかかりそうである。ブラック・パワー、レッド・パワー、チカーノ運動が高揚した60年代と異なり、現在は経済不況と保守主義が合衆国をおおっており、民族集団にとっては不利な状況にある。ヒスパニックはローカルなレベルで代表権を確保し、それを積み上げていくことで州や連邦レベルに民族集団の利益を表現していくしか現実的な方法はないだろう。必要なのは経験であり、ヒスパニックの将来を語るには未だ時期が早すぎる段階といえよう。

## あ と が き

チカーノの研究書は年々出版され、新しい事実が伝えられている。従って、この概説は10年も経たない内に加筆と修正が必要になってくるだろう。いずれにせよ、チカーノの来た道を要約した本稿を起点とし、合衆国における今後のチカーノ研究の進展

に目を注ぎながら、その流れをこれからも追っていきたいと思っている。

この「あとがき」を書き終えたかと思う間もなくブッシュ新政権が誕生し、2名のヒスパニックが要職に指名された。マヌエル・ルーハン（ニューメキシコ州出身のイスパーノ）が内務長官に選ばれ、ラウロ・カバソス（ヒスパニック）が教育長官に留任することになったのである〔朝日新聞 1989：1月14日〕。このように、チカーノやヒスパニックをとりまく状況は刻々と変化しつつある。

## 謝 辞

草稿を友枝啓泰教授と小山修三助教授が読み、有益なコメントを下された。お蔭で何箇所か修正したり加筆することができた。ここに記して謝意を表したい。ただし、本稿でのべた事実や解釈に誤りが出てきたとしても、それは私の責任である。

## 文 献

アードーズ

1984 『大いなる酒場』平野秀秋訳 晶文社。

有賀 貞・木下尚一(編)

1979 『概説アメリカ史—ニューワールドの夢と現実』有斐閣。

ACUÑA, Rodolfo

1972 *Occupied America: The Chicano's Struggle toward Liberation*. San Francisco: Harper and Row, Canfield Press.

朝日新聞

1986 9月24日, 27日, 10月4日の記事。

1989 1月14日の記事。

BLAWIS, Patricia Bell

1971 *Tijerina and the Land Grants: Mexican Americans in Struggle for Their Heritage*. New York: International Publishers.

BUSTAMANTE, Jorge B.

1975 *Espaldas Mojadas: Materia Prima para la Expansión del Capital Norteamericano*. El Colegio de México. Cuaderno 9 de Centro de Estudios Sociológicos.

CAMARILLO, Albert

1979 *Chicanos in a Changing Society: From Mexican Pueblos to American Barrios in Santa Barbara and Southern California, 1848-1930*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.

CAMPA, Arthur L.

1979 *Hispanic Culture in the Southwest*. Norman: University of Oklahoma Press.

CORTÉS, Carlos E.

1980 *Mexicans*. In *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups*, pp. 697-719.

DEUTSCH, Sarah

1987 *No Separate Refuge: Culture, Class, and Gender on an Anglo-Hispanic Frontier in the American Southwest, 1880-1940*. Oxford: Oxford University Press.

DIEZ-CANEDO RUIZ, Juan

1984 *La Migración Indocumentada de México a los Estados Unidos: Un Nuevo Enfoque*. México: Fondo de Cultura Económica.

黒田 チカーノの来た道

DIDION, Joan

1987 Miami, Miami: 'La Lucha', Miami: Exiles, Washington in Miami. *New York Review of Books* XXXIV (9), (10), (11), (12).

DOBYNS, Henry F.

1976 *Spanish Colonial Tucson: A Demographic History*. Tucson: University of Arizona Press.

FITCH, Bob

1974 *Tilting with the System: An Interview with César Chávez*. In Chris García (ed.), *La Causa Política: A Chicano Politics Reader*, Indiana: University of Notre Dame Press, pp. 360-365.

GANN, L. H. and Peter J. DUGNAN

1986 *The Hispanics in the United States*. Boulder, Colorado: Westview Press.

GARCÍA, Chris

1974 *La Causa Política: A Chicano Politics Reader*. Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press.

GARDNER, Richard

1970 *¡Grto!: Reies Tijerina and the New Mexico Land Grant War of 1967*. New York: Bobbs-Merrill.

GERHARD, Peter

1982 *The North Frontier of New Spain*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

GONZÁLES, Nancie L.

1969 *The Spanish-Americans of New Mexico: A Heritage of Pride*. Albuquerque: University of New Mexico Press.

GONZÁLES, Rodolfo

1967 *I am Joaquín: Yo soy Joaquín*. Bantam Books.

HALL, G. Emlen

1984 *Four Leagues of Pecos: A Legal History of the Pecos Grant, 1800-1933*. Albuquerque: University of New Mexico Press.

ホーフスタッター, R.

1988 (1955) 『改革の時代—農民神話からニューディールへ』清水知久訳 みすず書房。

HOLMES, Jack E.

1982 *Success and Failure: The Limits of New Mexico's Hispanic Politics*. In Renato Rosaldo et al. (eds.), *Chicano: The Evolution of the People*, Florida: Robert E. Krieger Pub. Co., pp. 238-248.

黒田悦子

1978 「スペイン系およびメキシコ系アメリカ人の社会的・文化的特性とチカーノ運動—ニュー・メキシコ州アルバカーキーの事例より—」綾部恒雄編『アメリカの民族集団—文化人類学的研究—』日本放送出版協会, pp. 119-186。

1982 「危機に立つ民族性と民族文化—ニュー・メキシコ州タオスのスペイン系アメリカ人(イスパノ)の葛藤—」綾部恒雄編『アメリカ民族文化の研究』弘文堂, pp. 83-136。

1984 「都市の時間と象徴—スペイン系アメリカ人の小都市—」中村孚美編『都市人類学』至文堂, pp. 79-97。

1985 「チカーノとは何か」綾部恒雄編『民族とエスニシティ』アカデミア出版会, pp. 226-233。

LEÓN-PORTILLA, Miguel

1972 *The Norteño Variety of Mexican Culture: An Ethnohistorical Approach*. In Edward Spicer and Raymond Thompson (eds.), *Plural Society in the Southwest*, Albuquerque: University of New Mexico Press, pp. 77-114.

マーティン, ダグラス D.

1986 『西部の町の物語』高橋千尋訳 晶文社。

MOORE, Joan W.

1970 *Mexican Americans*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc.



- NABOKOV, Peter  
 1969 *Tijerina and the Courthouse Raid*. Berkeley, Calif: Ramparts Press.  
*Newsweek*  
 1979 Sept. 24.
- 大橋健三郎 (編)  
 1969 『講座アメリカの文化—フロンティアの意味』南雲堂。
- ORTÍZ, Roxanne Dunbar  
 1980 *Roots of Resistance: Land Tenure in New Mexico, 1680–1980* (Monograph No. 10).  
 Los Angeles: Chicano Studies Research Center Publications and American Indian  
 Studies Center, University of California Press.
- PADILLA, Felix M.  
 1985 *Latino Ethnic Consciousness: the Case of Mexican Americans and Puerto Ricans in Chicago*.  
 Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press.
- PAREDES, Américo A.  
 1958 *With His Pistol in His Hands: A Border Ballad and Its Hero*. Austin: University of  
 Texas Press.
- PITT, Leonard  
 1966 *The Decline of the Californios: A Social History of the Spanish-Speaking Californians, 1846  
 –1890*. Berkeley: University of California Press.
- ROMO, Ricardo  
 1983 *East Los Angeles: History of a Barrio*. Austin: University of Texas Press.
- ROSENBAUM, Robert J.  
 1981 *Mexicano Resistance in the Southwest: “The Sacred Right of Self-Preservation”*. Austin:  
 University of Texas Press.
- SCHLESINGER, Andrew Bancroft  
 1971 Las Goras Blancas, 1889–1891. *Journal of Mexican-American History* 1: 8–143.
- スミス, H. N.  
 1971 『ヴァージンランド—象徴と神話の西部』永原誠訳 研究社。
- STEINER, Stan  
 1970 *La Raza: The Mexican Americans*. New York: Harper and Row.
- SWADESH, Frances L.  
 1968 The Alianza Movement: Catalyst for Social Change in New Mexico. *Proceedings  
 of the 1968 Annual Spring Meeting, American Ethnological Society* (Seattle), pp. 162–177.  
 1974 *Los Primeros Pobladores: Hispanic Americans of the Ute Frontiers*. Notre Dame, Indiana:  
 University of Notre Dame Press.  
 1980 Spanish. In *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups*, pp. 950–953.  
 1982 The Alianza Movement: Catalyst for Social Change in New Mexico. In Renato  
 Rosaldo et al. (eds.), *Chicano: The Evolution of the People*, Florida: Robert E. Krieger  
 Pub. Co., pp. 258–268.
- The New Mexican*  
 1979 July 20, 31, Sept. 13.
- THERNSTROM, Stephan (ed.)  
 1980 *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups*. Cambridge, Mass: Belknap Press  
 of Harvard University Press.
- TIJERINA, Reies  
 1978 *Mi Lucha por la Tierra*. México: Fondo de Cultura Económica.
- VIGIL, Maurilio E.  
 1987 *Hispanics in American Politics: The Search for Political Power*. Lanham, New York:  
 University Press of America.
- WESTPHALL, Victor  
 1983 *Mercedes Reales: Hispanic Land Grants of the Upper Rio Grande Region*. Albuquerque:  
 University of New Mexico Press.